

かささぎ通信 第158号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2026年 4月 10日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

2026年3月の「森三郎の作品を読む会」では、「年あけ証文」(『日本児童文学』7、1948年4月)を読みました。

「年あけ証文」は「ねんあけしようもん」と読みます。「年あけ(ねんあけ)」は「年季明け(年期明け)」の省略で、「約束した奉公の期間が満了すること」(『日本国語大辞典』)という意味です。

魔女は女中を一人、三年の期間を区切って使っていました。その女中は三年が過ぎると魔女の家政女学校を卒業した証拠として、「年あけ証文」を書いてもらいます。そして怠け者で失敗も多かったけれど三年間働いたお礼として、これからの幸福のために入用なものをつかなえてもらえらるることになります。女中は「美」と「知恵」のどちらを選ぼうか考えますが、「美」を選びました。女中は白鳥の背に乗って、インクの海を乗り越え、童話の中の王女様のように美しくなり、領主の息子の美しい若様と結婚します。

女中は今や御台様(みだいさま)となり、「本当に美しい」と称賛されます。しかし、かつての自分のことなど覚えていない御台様は目下の者に対する思いやりなど全くありませんでした。

御台様をこの国に乗せてきた白鳥は、お屋敷の池で大切に飼われていて三年たった時、死んでしまいます。また三年間、御台様に仕えていた女中が「年季が明けたのでお暇をいただきます」と伝えに来た時、御台様の口からなぜか「年あけ証文を書いてあげよう」という言葉が出ます。それをきっかけに、御台様は自分がかつて魔女のところへ奉公をしていた怠け者の女中であつた過去を思い出します。幸福なはずの生活の中で、過去の不幸な運命を思い、自分の不幸せを嘆かずにはいられないのでした。

読み終わって、集まったメンバーはすぐには感想が出ませんでした。なかなか複雑で難解に思えました。しかし、魔女の国とこの国

とを隔てている不思議なインクの海の表現をかき分けると、そのあい間から作者の言いたい言葉が浮かびあがってきました。

女中が年あけの褒美に「美」を選んだ時、魔女から「それは一番けんのんな幸福というものだ」と言われます。「けんのんな」とは「危険な」という意味です。「人間の幸福にとつて一等肝心なのは、過去に悩まされたいということなのだ」と念押しされました。その意味は魔女が書き換えた「年あけ証文」の言葉で後に明らかになります。そこには「祈りに目覚めて更生の心を得た者へのみ、つらい過去の年期が明けるであろう」と書かれていました。

御台様は、自分を取り巻く「回り合わせ」を幸福にも不幸にもするものは、自分自身の心の中にあることには気づきましたが、その先にたどり着きませんでした。年あけ証文に書かれていた「祈りに目覚めて更生の心を得る」ということを行動に変えるならば、かつての自分と同じ立場の女中たちへの思いやり・優しさを示すことであり、それこそが過去の不幸せからの解放につながることも読み取れました。

「森三郎の作品を読む会」会誌『かささぎ』第7号原稿募集

内容 森三郎(作品・人物像等)に関する研究や感想文等

分量 1ページ…200字×25行×3段=1500字

6ページまで(1ページ目冒頭は表題・筆者名に200字×4行×2段=1600字を充てる)

様式 MS明朝11ポイント

原稿締切 2026年9月11日(金)「読む会」当日 厳守

〈次回予定〉2026年5月8日(金)午後一時半~三時半

「麝香(じゃこう) おうむ」(こどもの国文庫1『魔法』、四国出版、1947年11月)

「アオイの大臣(おとど)」(『幼年童話集 帽子に化けたクロネコ』東京一陽社、1949年2月)